

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20730366

研究課題名（和文） 盲導犬の機能的向上のための育成技術の改良

研究課題名（英文） Improvement on guide dog raising technique

研究代表者

甲田 菜穂子 (KODA NAKO)

東京農工大学・大学院共生科学技術研究院・准教授

研究者番号：90368415

研究成果の概要（和文）：

転換期にある盲導犬事業の発展に寄与することを目的とし、3種の調査を行なった。より視覚障害者の立場に立った盲導犬の質的向上を目指し、盲導犬使用者に対して自分の盲導犬の使いやすさや要望を調査した。さらに、盲導犬を使っていない視覚障害者に対して、盲導犬への意識、歩行や日常生活の実態と要望の調査を行なった。また、日本全国の盲導犬使用者団体の活動実態調査を行なった。それにより、今後の盲導犬の育成と普及事業のあり方に関して考察した。

研究成果の概要（英文）：

Three kinds of surveys were conducted to improve guide dog programs at a turning point today. First, I asked guide dog users the usefulness and need of their own guide dogs to improve the quality of guide dogs. Secondly, I investigated visually impaired persons who did not use guide dogs knowledge and attitudes toward guide dogs, and situations and need of their walking and daily life. Finally, I investigated guide dog user groups their activities and situations. Ideal guide dog programs were discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：盲導犬、視覚障害者、育成、評価、歩行

1. 研究開始当初の背景

盲導犬は、視覚障害者の安全な単独歩行や、より自立的な生活を実現するのみならず、社

会参加の促進や心身の健康増進など、視覚障害者福祉に非常に役立っている。近年、視覚障害者および盲導犬使用者にも高齢化、障害

の重複化、生活スタイルの多様化が起きている。その上 2002 年には、身体障害者補助犬法が施行され、盲導犬の有用性は法的にも認められ、公共的施設に盲導犬同伴利用の受け入れを義務づけるなど、その使用が促進されると同時に、育成事業者と使用者にも適切な盲導犬を育成・管理する義務が明文化された。このように使用者の社会参加が増えるに伴い、求められる盲導犬の特性もより高度化、多様化していくことが想定される。つまり従来の育成技術や普及促進制度を改良する必要が生じてきたのである。

盲導犬は大変有用であるが、その育成では、適性ある候補犬を繁殖、選別、訓練するのに金銭的、時間的、労力的コストがかかることは、よく知られている。欧米では、盲導犬候補犬の適性評価と訓練の成否の関連についての研究が行われている。各国において共通する課題は、候補犬の怯えと集中力の欠如傾向の除去、健康面では遺伝病の除去であった。怯え傾向は遺伝する割合が高いが、行動特性上の適性は総じて発達初期には見極めにくかった。研究代表者は、候補犬とその飼育者の関わりを縦断的に行動観察し、イヌの発達に伴って盲導犬の適性がより強く発現することを実証した。

日本においても、盲導犬候補犬の適性評価法が開発され、使用されるようになった。この候補犬の科学的評価法は、Asia Guide Dogs Breeding Network というアジアにおける良質な盲導犬候補犬の繁殖に関する国際連携組織の結成と運営にも寄与している。

ところが、盲導犬は視覚障害者が個人の自立のために使用するものであるにもかかわらず、世界的にも、候補犬の適性は訓練士側からしか評価していない施設が多く、育成側が良いと判断したイヌが盲導犬として視覚障害者に貸与されるだけで、使用者側が実際にその盲導犬が使いやすいか否かは科学的に吟味され、フィードバックされてこなかった。別の見方をすれば、訓練終了後の盲導犬の生涯発達が十分に把握されていないということでもある。

このような背景を踏まえ本研究は、より安全により快適に歩行・共生できる質の高い盲導犬を育成し、使用者個人の多様なニーズに応えられるよう盲導犬の個性に合わせて使用者とマッチングさせていくために、使用者を対象に盲導犬の質向上への現状と要望についての調査を行なった。本研究により、使用者の盲導犬使用への満足度が上がり、視覚障害者福祉に大きく貢献できるだけでなく、社会の中で人と動物がより良く共生していくための示唆が得られるに違いない。本研究で得られた改良案は、将来的に、実際の飼育、訓練、指導場面で試行し、効果検証を行い、実用化して行く。その過程において本研究は、

基礎的調査として意義深いものである。

さらに、全国の潜在的な盲導犬希望者は 7800 人とされているのに対し、現在の盲導犬育成頭数は 185 頭、盲導犬使用者は 1069 名(2008 年 3 月現在)である。また実際に盲導犬を使用したいと申し込む人は、例年 150 名前後である。このように、現在でも盲導犬を希望していると推計されている人数と、実際に盲導犬の使用を決心する人数に差があることから、盲導犬の普及や育成にこれからも力を入れていかなければならない。つまり、良質な盲導犬を 1 頭でも多く育成すると同時に、盲導犬を必要とする人が望めば盲導犬使用に至れるように障壁を取り除く努力をすることが必要である。そのため、盲導犬使用を望んでいるにもかかわらず、使用申し込みに至らない理由や、盲導犬使用者が生活する地域で使用者団体がどのような活動を行ない、互いの支援体制を整えているかの実態調査も必要である。

2. 研究の目的

盲導犬は、視覚障害者の安全な単独歩行や、より自立的な生活を実現するのみならず、社会参加の促進や心身の健康増進など、視覚障害者福祉に非常に役立っている。近年、視覚障害者および盲導犬使用者にも高齢化、障害の重複化、生活スタイルの多様化が起きている。つまり従来の育成技術を改良する必要が生じてきたのである。本研究は、より視覚障害者の立場に立った盲導犬の質的向上を目指し、盲導犬使用者に対して自分の盲導犬の使いやすさや要望を調査した。さらに、盲導犬を使っていない視覚障害者に対して、盲導犬への意識、歩行や日常生活の実態と要望の調査を行なった。また、日本全国の盲導犬使用者団体の活動実態調査を行なった。それにより、盲導犬の育成と普及に関する包括的な考察を行ない、転換期にある盲導犬事業の発展に寄与することを目的とした。

3. 研究の方法

回答者のコミュニケーション手段に合わせて(点訳、音訳、メール、面接など)以下の 3 種の質問紙調査を実施した。盲導犬使用者を対象とした盲導犬の使用実態とその改良について、盲導犬を使用していない視覚障害者を対象とした日常生活の実態や盲導犬に対する意識について、盲導犬使用者団体を対象とした活動実態についてであった。

の調査は、関西盲導犬協会から過去 5 年間に盲導犬の貸与を受けた使用者 92 名を対象とし、56 名から回答を得た。質問紙は 3 部構成であり、盲導犬の使用状況、盲導犬の行動特性の 5 段階評価、盲導犬使用に関する要望であった。代替使用者には、現在の盲導犬

と1代前の盲導犬についての使用状況と行動特性評価を同様求めた。行動特性評価は、協会が候補犬に対して実施している評価項目と同じで、下位項目を含む、日常生活における「穏やかさ」「集中力」「落ち着き」「怯えのなさ」「吠えないこと」「作業意欲」「従順性」などについてであった。行動特性評価の対象となった盲導犬は、育成時の評価点を協会から提供してもらった。

の調査は、盲導犬を有効利用できる使用者を増やすために必要な対策を明らかにするために質問項目を設定した。全国の障害者のための福祉施設を經由して、当該施設利用者のうち、盲導犬を使用していない1級または2級の視覚障害者274名（有効回答）に生活実態、盲導犬に関する知識と盲導犬使用の利点と欠点についての予測などについて尋ねた。

の調査は、盲導犬使用者団体が快適な盲導犬歩行のために行なっている活動内容とその広がりの実態、今後の課題などについて尋ねた。全国の36盲導犬使用者団体に質問紙を配布し、24団体より回答があった。

4. 研究成果

の調査では、盲導犬使用者は、盲導犬を有効活用して外出や社会参加をしており、盲導犬との心理的交流も維持していた。使用者による盲導犬の行動特性評価では、使用者の現在と過去の盲導犬の行動評価の間には統計的に有意な違いが見られず、全体的に高い評価であった。興味深いことに、使用者と協会の行動評価を比較すると違いが見られ、使用者の方が協会より評価が高く、使用者は協会が思っている以上に自分の盲導犬に満足していた。ただ歩行誘導中の集中力に関しては、使用者と協会共に評価が相対的に低く出ており、今後、訓練で強化していく必要があると考えられた。

使用者は、協会のフォローアップの充実や、特定の場所への誘導や落ちた物を拾うといった新たな盲導犬の作業も求めていた。また使用者が盲導犬と交通機関を使う頻度がかなり高いことと、訓練を強化して欲しいところに「乗車」が挙げられていたことから、乗車訓練（タクシーなどの乗用車への乗降や、電車とバスの座席に座る時の盲導犬の動き方）は重視すべき項目であることが伺えた。

今後は、訓練はしてあるけれども、あまり使わない作業を吟味し、新たに、使用者が自分で盲導犬に学習させる方法を共同訓練に取り入れれば、使用者の生活により適した盲導犬が育成できると考えられる。そうすることによって、使用者と盲導犬の絆もさらに深くなるという相乗効果も見込める。

さらに、盲導犬の質的問題とは無関係に、法的に盲導犬同伴利用が保障されている場

所での盲導犬の受け入れ拒否が未だ残っていることが、盲導犬使用時の問題として浮き彫りになった。

の調査では、盲導犬を使用していない回答者は、年齢的には中年が最も多く、自身の障害を受け止め、前向きに生活している人が多かった。しかし、老後に対する不安や、外出時に不慣れな所へ行くとき、道に迷ったとき、道路整備が充分になされていない環境などについてはストレスレベルが高かった。これらのストレスは、盲導犬使用によってある程度、緩和が見込めるものがあるが、盲導犬を今すぐ持ちたいと考えている人は4%、将来持ちたいと考えている人は13%、以前は持ちたいと考えていたが今は考えていない人は17%、盲導犬を持つと考えるとことはない人は55%、分からない人は9%であった。10年前の同様の調査と比較すると、盲導犬をすぐ持ちたいと考えている人の割合は不変であったが、将来持ちたいと考えている人の割合は増加していた。

盲導犬の機能に関する知識は、多くの回答者が既に持っていたが、盲導犬使用の際のフォローアップや飼育補助制度の存在や、盲導犬貸与の申し込み先などを知っている人の割合は相対的に小さく、具体的に盲導犬使用の行動を起こすための情報の周知に今後の課題があることが分かった。

盲導犬の利点の推測については、好きなときに安全な単独歩行が実現できるという歩行の補助具としての第一の機能のみならず、生活を共にする伴侶動物としての心理的な支援機能も多くの人々が指摘していた。一方、盲導犬の欠点の推測については、手間や金銭面に代表される飼育にまつわる負担や必ず迎える盲導犬との離別時の心理的衝撃を指摘する人が多かった。

マスコミやインターネットが、回答者の日常生活の中での重要な情報媒体であったが、人づてによる情報収集の手段も同等の位置づけにあった。これらの媒体を効率よく使うことによって、盲導犬使用に必要な情報を必要な人に届けていくことができるだろう。

施設利用者は、自発的に社会との関わりを持っている人のため、この調査結果は全国の視覚障害者の実態を代表しているわけではない。しかし、彼らは外出機会が比較的多く、今後、盲導犬事業と関わりを持つ可能性の高い集団として結果を利用していく価値がある。もっとも、社会とのかかわりが少なく、調査対象から抜け落ちてしまった視覚障害者への対策も将来の課題として残っている。

の調査では、盲導犬使用者団体は、主に都道府県レベルを中心として地域の使用者と晴眼者のメンバー間の交流や情報交換を活動として主に行なっていた。少人数で構成される団体が多く、地域の行政や盲導犬協会

と緩やかなつながりを持っていたものの、外部との交流や外部への働きかけを積極的に行なうというよりは、個別的な内部的な活動を中心としていた。

社会の変革に伴い、盲導犬が社会の中で持つ意味付けも盲導犬に期待されることも変化してくる。使用者に対して盲導犬との生活の実態や自分の盲導犬に対する満足度を定期的に調査し、改良と改善を加えていくことは、盲導犬の質を保証する上で欠かせない。

盲導犬を使用して快適な歩行を実現することは、多くの視覚障害者が可能性として考えていたが、盲導犬使用を決心するには、今後10年近く盲導犬というイヌと共に暮らし、その生活に責任を負う決心をすることでもある。盲導犬の効用を認めながら、実際の使用に踏み出せない懸念の払拭を支援していく体制を整え、その制度を周知していくことで、盲導犬を有効利用できる人が増え、個人の生活の質の向上につながるのみならず、社会にとっても好ましい結果を導くことになる。その実現を盲導犬協会や行政にゆだねるのではなく、使用者団体など地域の個々の課題にきめ細かく対応しやすい小回りのきく活力も大きな力を発揮するはずである。そのことは、現使用者にとってもより快適な盲導犬との生活が実現できることにつながると考えられる。これまで盲導犬育成事業では、盲導犬の慢性的な不足の解消に重点を置き、新たな盲導犬使用者の開拓にはそれほど力を入れてこなかった。従来の盲導犬育成事業の課題が解消されつつある現在、本研究はより広範囲、より高次の社会的使命を果たすために事業の方向性を固める一助になるのではないかと考える。

これらの調査と並行して、社会における盲導犬の役割、盲導犬を含む身体障害者補助犬との共生についての先行研究と実践をまとめ、今後の盲導犬事業のあり方について提言を行なった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

甲田菜穂子、盲導犬の効用、ヒトと動物の関係学会誌、査読無、Vol.24、2009、pp.19-21

〔学会発表〕(計1件)

甲田菜穂子、盲導犬の効用、ヒトと動物の関係学会第15回大会

〔図書〕(計1件)

林谷秀樹、渡辺元、佐藤俊幸、甲田菜穂子、

対馬美香子、東京農工大学出版会、人が学ぶイヌの知恵、2009

〔その他〕

井上明美、甲田菜穂子、久保ますみ、石上智美、古橋博昭、「盲導犬との生活に関するアンケート」の調査報告、盲導犬情報、Vol.4、2010

(http://www.gd-rengokai.jp/publication/gdinfo/bn_04.html)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

甲田 菜穂子 (KODA NAOKO)

東京農工大学・大学院共生科学技術研究院・准教授

研究者番号：90368415